

二村英幸先生のご退職にあたって

人間科学部長 益田 勉

2017年3月をもって、人間科学部心理学科の二村英幸教授が定年により退任されることになった。2009年4月に新設間もない心理学科に赴任されて以来、8年の間教鞭をとられた。心理学科の立ち上げに際して大きな足跡を残してのご退任である。心理学科を構成する3つのコースのうち、主としてビジネス心理学コースに関連する科目を担当されることを期待されての入職だったが、その期待通りに赴任と同時にビジネス心理学コース2年次の必修科目である「産業・組織心理学」を、学科第1期生を対象に教授された。それ以来、同コース3年次の必修科目である「ビジネス心理学実習」の新規開講に際してのカリキュラム開発や実習先の開拓、実際の実習の展開に当たってのマニュアルの整備などに精力的に取り組まれた。このような新科目を学部・学科内に衆知・広報するために、プロモーションビデオを制作するというアイデアを出され、実際に制作されたビデオは、オリエンテーション等で学生に実習内容を紹介する上で効果的なツールとして機能することになった。

二村英幸先生のご職歴は1969年以来半世紀近くにわたる。そのうち37年間は民間企業（㈱日本リクルートセンター、㈱人事測定研究所、㈱リクルートマネジメントソリューションズ）での経歴であり、その間一貫して適性検査・教育研修サービスの人事教育事業に携わられた。心理アセスメントの開発および適用のスペシャリストとして活躍される傍ら、その学術的基礎を固めるための研究にも精力的に取り組まれた。その成果は多くの著書と学術論文として発表された。特に『人事アセスメントハンドブック（共編著・2000年）』、『人事アセスメント入門（単著・2001年）』、『人事アセスメント論（単著・2006年）』などは、先生が斯界の第一人者であることを誰もが認める著作となった。

二村英幸先生は、学会活動にも熱心に取り組まれた。産業・組織心理学会（2002年～2015年・理事）、経営行動科学学会（1999年～2001年・理事）、日本人材育成学会（2003年～2014年・理事）、日本テスト学会（2003年～2014年・理事）など学会活動においても大きな実績を残され、特に2012年9月には産業・組織心理学会・第28回年次大会の大会実行委員長として、本学文教大学を会場として盛況のうちに大会を成功させた。この間、計28回の学会発表をされており、また産業・組織心理学会においては学会設立以来、年次大会には1回も欠かさず参加（皆勤）という、記録には残らない記録を打ち立てられている（ご本人の証言による）。

学部教員としては、教科教育のほか就職委員・進路指導委員としても活躍された。新設の心理学科が第1回の卒業生を送り出すに当たり、企業就職希望者を支援する目的で「スペシャル就活ゼミ」が組織された。これは学園戦略経費の支援を仰いで行われる特別企画だったが、その後学部全体に広げられた。この「スペシャル就活ゼミ」においても、企画・運営の全般にわたって尽力され、現在では人間科

学部における特徴的なキャリア支援施策の1つに位置づけられている。さらに学部進路指導委員として、4年生の就活体験記である『先輩からのメッセージ～夢をつかもう～』を企画し、発刊にこぎつけるなど、学部におけるキャリア支援の取り組みにいくつもの新機軸を打ち出され、実践につなげた。そのほか、心理学科内での「キャリア支援テスト」の実施と学生へのフィードバック・活用などの取り組みなども含め、二村英幸先生の際立った実践志向が形となったものは多い。研究者としても常に実践の立場に身を置いて「論語読みの論語知らず」に陥らないことを自らに課しておられたように思われる。二村先生は常に心理アセスメントの実践家であり、受検者となった学生諸君とともに心理アセスメントの效用と限界について学び続けられているように筆者には見えた。こうした大学教育における心理アセスメントの実践の一端は、筆者と共同の学会発表「カレッジ・インパクトに関する心理学的研究の試み～ある心理学系学科における縦断的研究（1）（2）～」(産業・組織心理学会第30回・32回発表)にまとめられている。その結語に二村先生は次のように述べられている。「本研究では教育の実践結果から示唆を得たにとどまり、学士力が忠実に捉えられたわけではないし、学習過程が明らかになったわけではない。また、得られた知見は産業界の要請とも符合するように思われるが、実務家との議論を深めたいうえでの、測定法の洗練化や育成強化策の模索が今後の課題になろう。」つまり、探究は緒についたばかりという総括であろう。

こうした先生の探究姿勢は、学生指導にも反映されることになったようである。ゼミ生の募集に当たって高い要求水準を示したためか、二村ゼミは少人数である場合が多かった。しかし、それだけに卒業論文の完成度は高く、毎年、卒業論文を印刷された小冊子にまとめて学生や学科教員に配られていた。それには「卒業生の親御さんにも子弟の成果をみていただきたい」という親心からなる思いもあったと聞く。

以上、簡単ながら文教大学における二村英幸先生の仕事について紹介させていただいた。最後に筆者の個人的な述懐を交えて締めくくることをお許し願いたい。筆者と二村さんとの出会いは、1976年にさかのぼる。筆者は新入社員、二村さんは新任の管理者で筆者の直属の上司だった。以来40年、仕事上の接点がほとんどない時期もあったが、結びつきを維持しつつ直近の8年間は文教大学で隣り合わせの研究室で仕事をさせていただくことになった。双方の職業キャリアの始めと終わりで、このような形で仕事をするようになったことに、不思議な縁というものを感じざるを得ない。

二村さん、お疲れさまでした。またありがとうございました。そして今後ともよろしく願います。